

JAIR NEWSLETTER

日本国際政治学会

No. 22

January 1983

より開かれた学会づくりに向けて

理事長 川 田 侃 (上智大学)

1976年の秋、日本国際政治学会は、創立20周年を祝い、ひとつの節目を刻んだ。近く、こんどは30周年を迎えようとしている。そのときに備え、「企画・研究委員会」のなかに、少し早すぎるといわれるかもしれないが、「30周年記念事業小委員会」を設け、学会として漸次、その態勢を整えていくこととなった。

20周年後の日本国際政治学会の充実・発展ぶりは、質量ともにめざましいものがみられた。これは学会の基礎を築かれた初代の神川彦松理事長をはじめ、英修道・田中直吉両理事長による献身的なご努力の数々に言及せずして語ることはむろんできないが、20周年後の日本国際政治学会の運営を背負われた細谷千博・谷川榮彦両理事長の力量によるところも大きい。

ここ数年間の学会運営をみると、この両理事長のもとで、多数の会員が積極的な協力を惜まず、力を寄せ合い、こぞってこの学会を今日の水準におし上げてきた感が深い。学会機関誌も、毎号多くの力作を揃えるようになり、加えて「書評小委員会」の活動により、書評欄も充実してきた。ニューズレターも、いまでは会員相互間のコミュニケーションの緊密化に、なくてはならないものとなった。

毎年、春秋の研究大会にも多数の会員が参加し、研究分科会活動と相まって、歴史記述から数量分析に至るまでの多方面にわたる諸研究の促進について、大きな知的刺激となっている。学会組織も、対外交流推進のための配慮や業務の内容に応じた事務局分室体制の整備、また会計部の独立性の維持など、その土台がいっそう広がり、

しっかりとしてきた。こうして、日本国際政治学会は、いま財政事情が許容するぎりぎりのところまで、その活動をフルに展開しているといえてよい。

これほどまでに高潮してきた学会の活動水準を、この任期の2年間を通じて、落とすことなく保持し続け、やがて30周年を迎えるべき次の理事長のもとでの飛躍の時代へと、幸いによくつないでいくことができようか。去る10月、日本国際政治学会の理事会において、理事長に選任されたとき、私はこうした緊張の思いに包まれた。微力ながら力を尽す所存であるが、私の力不足のところは、会員各位の助力をまつほかはない。この機会に、ご鞭撻とご協力を切にお願い申し上げたい。

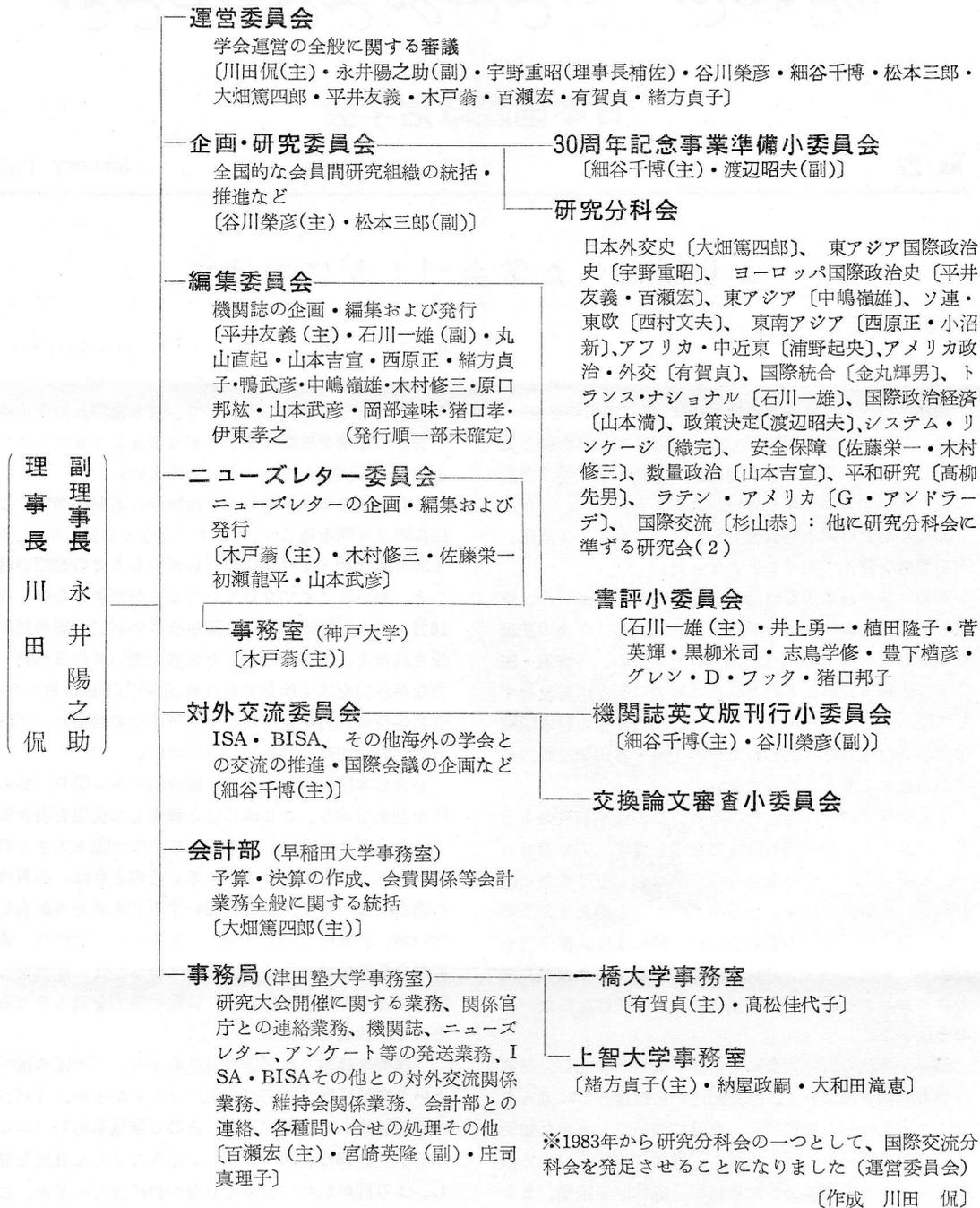
いま日本国際政治学会は、財政的にみる限り、冬の時代を迎えており、ここはじっと我慢して支出を引き締め、いかねばならない。しかし、やがて一段と大きく飛躍すべきときが必ず訪れてこよう。そのときは、会員内外に物心両面でのご援助をお願いすることがあるかもしれないが、いまはこの飛躍のときを胸に抱きながら、着実に学会活動のいっそうの充実をはかり、また学会をより開かれたものにするために、日常の努力を積み重ねることこそが大切と考える。

「国際関係論」などと酒落込むより、「外国事情学」という意識に徹する方が健全ではないかとか、「パラダイム偏執病」に傾斜するな、とのご意見もある(ニューズレター、18号、20号参照)。私もこうした意見を尊重し、より開かれた学会づくりをつねに念頭に置き、この2年の任期を会員各位とともに歩む決意である。

1983年 春季研究大会のお知らせ

日 時 : 5月21日(土)、5月22日(日)
会 場 : 上 智 大 学
共通テーマ : アジアにおける国際政治の変動(仮題)

学会組織図



新理事・監事 (1982年10月～1984年10月)

理事 有賀 貞、池井 優、石川忠雄、宇野重昭、内山正熊、浦野起央、衛藤藩吉、大畑篤四郎、大島英樹、緒方貞子、岡部達味、神谷不二、川田侃、木戸 蓊、小林幸男、高坂正堯、佐藤栄一、関 寛治、高柳先男、谷川榮彦、永井陽之助、

中嶋嶺雄、中原喜一郎、馬場伸也、平井友義、福田茂夫、藤井昇三、細谷千博、松本三郎、宮里政玄、武者小路公秀、百瀬 宏、山極 晃、山本 満、蠟山道雄

(全35名)

監事 齊藤鎮男、高橋通敏、吉村健蔵 (3名)

学会活動報告

(1982年7月～12月)

- 7月17日 運営委員会開催
- 7月25日 新評議員候補者確定
- 8月1日 事務局長交替(大島英樹氏→百瀬 宏氏)
- 8月10日 新評議員就任依頼状発送
- 9月2日 新評議員の投票(郵送)による次期理事35名・監事互選依頼状の発送(25日締め切り)
- 9月3日 機関誌『国際政治』第81号(昭和57年度第2号)「日本外交の思想」の発行、配布
- 10月1日 次期理事・監事選挙管理委員会開催、次期理事35名・監事3名選出
- 10月22日 運営委員会・理事会開催
- 10月23～24日 秋季研究大会開催(於成蹊大学) 大会出席者約330名
- 10月23日 新理事による理事会開催、理事長に川田 侃氏(上智大学)を選出、副理事長に永井陽之助氏(東京工業大学)を選出
- 10月23日 機関誌『国際政治』第82号(昭和57年度第3号)「第2次大戦前夜」の発行、配布
- 10月23日 書評小委員会の開催
- 10月24日 運営委員会の開催
- 10月24日 編集委員会の開催
- 11月15日 コーエン教授を招き共通研究会開催(於竹橋会館)
- 11月19日 維持会員を対象とする懇談会(講演会)を開催(講師 中嶋嶺雄氏、於霞山会館)
- 12月18日 運営委員会開催

編集委員会だより

平井友義(大阪市立大学)

○ 編集委員会は、今期も平井友義編集主任、石川一雄編集副主任が継続して運営にあたることになりました。また別掲されておりますように、編集委員として新たに5氏が加わりました。書評小委員会は全員交替しました。

○ 今年度(1983年)は、次の3冊を刊行致します。

第73号(編集責任:丸山直起)「中東の政治変動」

第74号(編集責任:山本吉宜)「国際政治における理論と実証」

第75号(編集責任:西原 正)「日本外交における“非公式接触者”」

◇ 記事訂正 ◇

機関誌第76号(編集責任:緒方貞子)「国際組織と体制変化」(仮題)の原稿公募広告を前号(No.21)に掲載

致しましたが、記事の中に「原稿締切日 83年6月末」とありますのは、正しくは83年12月です。編集責任者ならびに執筆予定者の皆様にはたいへんご迷惑をおかけ致しました。お詫びして訂正致します。

◇独立論文(自由論題)の原稿募集について

編集委員会では、特集関連論文とは別に、自由論題の論文(論文、研究ノート、研究動向)を次の要領で募集しております。執筆希望者は石川編集副主任までご連絡下さい。(1)原稿は常時受付ける。原稿は4部作成し、それぞれに要旨(400字5枚以内)を付す。(2)原稿審査には編集委員および、編集委員が依頼するレフェリー(2名)があたる。(3)応募の秘密は厳守する。

◇書評原稿の募集について

現在機関誌書評欄は、応募原稿と依頼原稿によって構成されています。執筆者のご都合等により、なかなか企画通りにはいきませんが、今後もより多くの書評を掲載する計画です。とりわけ若い会員諸氏からの原稿を期待しています。制限枚数は、書評は15枚以内、書評論文は30枚以内です(いずれも400字)。執筆希望者は、葉書で書評小委員会世話人(石川編集副主任)までご連絡下さい。

◇機関誌第77号『国際統合の研究』

(仮題)の原稿募集について

現在国際統合の研究は、国家主権の廃棄のプログラムに比重をおきすぎて実際の国際政治の動態状況との乖離を著しくしたこと、あるいは70年代以降のECにおける統合の鈍化現象の影響などにより、理論研究の面では発展停止状況に直面している。

本特集号では、一つのブレイクスルーをめざして、統合現象の動態の特色を国際政治と国内政治の接点・交錯領域においてとらえる理論的視座を新たに設定し全体を構成する。この視座は次の三点で構成する。(1)構成国の対内・対外政策に及ぼす統合の影響の実際——農産品価格の共通化や域外、域内関税の共通化、また共通の通商政策への試みは、各国内の利益集団とその織りなす政治的意思決定の力学にどのような衝撃を与えるか。また軍事的安全保障政策の共通化についてはどうか。(2)軍事力による「脅しの体系」は、統合参加国の外交の実際において、どのように消化・吸収されているのか、あるいは「脅しの体系」は作動頻度を減らしているのか、それとも新たな形態をとりつつあるのか——要するに、統合現象とパワー・ポリティックスの動態は、その実際の展開においてどう異なるのか。(3)国際統合を参加国間の「対外政策の共通化」現象(J・S・ナイ)と広くとら

え、コメコンやASEAN等を含む諸事例を比較する。
各執筆者には、まず対象として統合の地域ないし事例を一つ選択し、その上で、(1)あるいは(2)、を論点として執筆して頂きたい。

執筆希望者は、論題と簡単な要旨を1983年5月末までに提出されたい。原稿締切りは、1984年3月末日の予定(400字50枚)。

連絡・問合せは、編集副主任まで。なお本年4月以降は、直接下記へ。

編集責任者 鴨 武彦
〒160 新宿区西早稲田1-6
早稲田大学政経学部

研究分科会の近況

平和研究分科会

高柳先男(中央大学)

当分科会は、去る10月24日の秋季大会日に、会員11名が参加して、会の活動方針について相談しましたが、つぎのことがきめられましたのでお知らせ致します。

I、年4回くらいの割合で、定例研究会をもつ。共通研究テーマとして、『もうひとつの安全保障方法を求めて』を選び、理論、歴史的事例、地域、国を問わず、広く研究する。

II、また定例研究会は、会員各自の自由なテーマについての研究成果の発表の場とする。

III、定例研究会が軌道にのり、一定の成果が得られた段階で、研究大会の部会やしかるべき機関誌にそれを発表する。

なお、第1回研究会は、グレン・フック会員による『英国の非暴力市民防衛論』(仮題・期日未定)を予定しております。

当分科会への参加者のリストを作成したいと思いますので、御希望の方は、下記に御連絡下さい。

東京都八王子市東中野742 中央大学2832号室
高柳先男 (電話0426-74-3217)

国際交流分科会

杉山 恭(青山学院大学)

国際交流は、今日の国際関係における重要な要素であり、その重要性は今後ますます高まるものと認識されています。にも拘らず、わが国におけるこの分野の研究および教育は、欧米諸国に比べて著しく立ち遅れているの

が現状です。

本分科会は、現代の国際社会において国際交流のもつ諸問題を理論的かつ実践的な立場から組織的に研究することを目的とするもので、そのための当面の活動として、内外の国際交流機関の実務家を交えた研究会を月1回の予定で開催することを計画しています。

第1回研究会は、下記の要領で開催する予定です。

記

国際交流分科会第1回研究会

日時 1月19日(水) 午後3時~5時

場所 青山学院大学青学会館1階校友会第1会議室
(地下鉄銀座線、千代田線、半蔵門線表参道
駅下車5分)

議題 岡崎久彦(外務省調査企画部長)

「外交政策と大学および研究機関の役割」

本研究会に出席御希望の方は、下記に御連絡下さい。

杉山恭 〒150 渋谷区渋谷4-4-25

青山学院大学国際政治経済学部

電話 (03) 409-8111

内線 2417または2318

大学紹介

津田塾大学国際関係研究所

許 世 楷(津田塾大学)

津田塾大学は、現在国際関係学科と英文学科、数学科をおき、それら三学科で以て、全学的な学芸学部を構成している単一学部の大学である。国際関係学科は、1969年に設置されたものであるが、その二年前から英文学科の中に国際関係論コースがおかれ、それを継承発展する形でできたものであった。津田塾大学の創設者津田梅子先生は、英学教育から始めたわけであるが、それはその国際的関心のしからしめたものであるともいわれている。そこで同大学創設七〇周年記念事業の一環として、津田先生その関心の現代的発展と思われる国際関係学科設置が決められたのである。

学科レベルのものとして、同学科は、日本で初めての例であり、したがって既成のモデルに縛られないこと、さらに女子大学であるので、あまり政治・経済・法律に偏りすぎないようにする必要があることなどから、比較文化をも含めて支柱の一つとする構想がとられた。また、第一外国語にあたるものを基礎言語と称して重視し、津田塾大学の伝統ある英語の他に、まずフランス語を加えて発足した。当初いづれはドイツ語、中国語、ロシア語、スペイン語をもそれらに加える予定もあったが、小規模

な大学では語学教育のための専任教員多数をそろえるのは容易でないため、今しばらく見合せている形になっている。しかし、第二外国語にあたるそれら科目には、それぞれ程度Ⅲ、Ⅳを設けており、熱心な学生は、関心にしたがって、けっこうそれら外国語もマスターしている。その他にあげるべき特徴としては、学年ごとにセミナーが開設され、必修になっており、「ハンドメイド」の教育が強調されていること、これらセミナー以外に、前記基礎言語、一年次の国際関係概論および二年次の比較文化序説が必修となっている他は、学生の自主的選択に任せている幅が大きいことであろう。

ところで、津田塾大学は小規模であるが、先発の英文、数学両学科ともに大学院を設け、修士・博士課程を完備し、質の高い教育を目指しているので、国際関係学科の方でも、1974年、1976年に、順次国際関係学研究科の修士・博士課程を開設した。ちなみに、学科卒業生は文学士、大学院の方は、国際学修士、その上は新制の学術博士をそれぞれ授与することにしており、学術博士第一号を去年送り出したばかりである。

これら教育機構の整備にともない、研究機構として、1975年に、国際関係研究所を設立、両者相補って研究・教育のいっそうの充実を期したわけである。同研究所では、現在「世界から見た日本・日本から見た世界」および「国際関係学研究教育のあり方」、という学術的および実践的共同研究を遂行している他に、院生と教員共同の他大学にもまたがる研究会の補助などに力点を置いて運営している。

前に国際政治学会に会場を提供したことがあったので、少なからぬ会員の方たちが津田塾大学のキャンパスにご来臨なさったことがあると思う。その見た目にこぢんまりとした感じの通りの大学でしかないが、津田塾大学の構成員すべてが、研究教育機構として充実すべきものは充実しようと志している。とくに筆者が比較的接触の多い範囲に限っていえば、国際関係学研究科の院生あるいはその先輩である研究助手・研究員の士気は高く、いずれは国際関係学科・研究科・研究所の主たる牽引力になることが期待されうる。学会諸先輩のご鞭撻をこう次第である。

会員による新著

(1982年3月まで、未完)

板垣雄三・川床睦夫責任編集「アラブとは何か—シンポジウム」出光美術館三鷹分館、1981年8月

伊藤憲一「ソ連は強いものには手を出さない—日本が強者であるための国際戦略」ごま書房、1982年3月

笠原正明「10億が走り出すとき—中国近代化への長い旅」

地球社、1982年3月

木戸翁「東欧の政治と国際関係」有斐閣、1982年3月

木村汎「北方領土を考える」北海道新聞社、1981年12月

高坂正堯「吉田茂—その背景と遺産」TBS・ブリタニカ、1982年2月

野村実編「待従武官宮城英一郎日記」山川出版社、1982年2月

南方平治・関野英夫「ソ連軍—軍事的脅威と五軍制の実体」教育社、1982年3月

黒柳米司(日本国際問題研究所)

事務局ニュース

編集後記

池井優前編集主任のあとをお引き受けし、残任期間というお約束で編集事務にたずさわってきたが、この10月で任期満了となり、正直のところほっとしている。不馴れなままにいろいろと工夫してみたつもりではあるが、ミスや至らない点が多く、会員の皆様に御迷惑をおかけしたことを恐縮している。しかし、それにもかかわらず、会員の皆様が、つたない編集事務に誠意を以て御協力下さり、貴重な御助言や暖かい激励を下さったことに深く感謝申し上げたい。『ニューズレター』は、次号から、木戸 蕪新編集主任をはじめとする新編集委員会によって面目を一新するはずであるが、会員の皆様におかれても、どうぞ倍旧の御協力を下さるようお願い申し上げます。なお、編集事務の交代が年度の末に行なわれたため編集技術上の理由から昭和57年度の最後の号にあたる本号まで旧編集委員会でお引き受けすることになったことを、御了承頂ければ幸いである。

編集委員会

12月20日

百瀬 宏
植田 隆子
宮前 志保
庄司真理子
(文責 百瀬)

昭和58年1月10日 発行
日本国際政治学会
ニューズレター委員会
〒187 東京都小平市津田町2-1-1
津田塾大学学芸学部国際関係学科
百瀬宏研究室内
発行人 川田 侃
編集人 百瀬 宏
印刷所 懶共同印刷所